

## オーストラリア小紀行

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/9283">http://hdl.handle.net/2297/9283</a>

## オーストラリア小紀行

## My travel in Australia

滋賀医科大学解剖学講座

工 藤 基

金沢大学を離任する直前の1998年2月、キャンベラで開催されたオーストラリア神経科学協会年次総会に出かけた。サテライトとして私の恩師であり聴覚生理学の大御所L. M. Aitkin先生の退官記念学術集会在キャンベラ郊外の避暑地スレドボで持たれ、Aitkin先生ゆかりの人がオーストラリア国内はもとより世界中から65人もあつまった。ブリスベンのJack Pettigrewはカモノハシのくちばしの電気-振動受容器官の皮質マップについて、サンフランシスコのMike Merzenichはサル聴覚皮質の学習による可塑性について、ウイスコンシンのJohn Bruggeはネコ聴覚皮質方位検知機構について語った。そのほかにもBill WebsterやDexter IrvineやMike Calfordなど聴覚生理学の錚々たるメンバーが顔をそろえている。その興味深い話に思わず引き込まれてしまう。Moleculo-genetic全盛の昨今、System neuroscienceいまだ健在なりという観があった。

日本からは私がただ一人招待講演者として参加しモグラの聴覚中枢の特殊進化について話をした。最後にAitkin先生は比較解剖学や動物行動学にも造詣が深いこと、単に生理学の大家というだけでなく今ここに立って話をしている私を変え研究哲学を授けてもらった恩師であると結んだ。Aitkin先生は私が話し終わるとやつぎばやにいろいろな質問をして私の発表を盛り上げてくれた。いわく「モグラの網膜は光感受性はあるの?」「モグラの交配は地下トンネルのなかですの?」アカデミックな中にもユーモアあふれる受け答えになった。Dexter Irvine氏が最後に「モグラの鳴き声はどんな風?」と質問。私はおもむろにカセットレコーダーを取り出しその実音声を聴衆に聞かせた。場内割れんばかりの拍手のなか持ち時間きっかりで講演を終えることができた。

夜のパーティーはイタリアレストランを借り切って、肩の凝らないスピーチと爆笑の渦、まるで同窓会のようなだ。私がメルボルンにいた12年前とみんな変わっていないなあと思った。当時大学院生だった人たちも5年とか7年とかの期限付きの地位を得て研究を続けている。彼らは物価の安さを考慮しても驚くほど安い給与で結構

楽しそうに暮らしている。Aitkin先生も退官後は仕事は一切やめて自宅で油絵を描いて過ごすという。失業保険や年金が充実しているせいもあるかもしれないが、この精神的な豊かさはどこからくるのだろうか。これからの低成長時代の日本でも見習うべき面があるかもしれない。ほんやりそんなことを考えながら、オーストラリアワインを味わう。聞こえてくる訛りの強い英語、みんな一緒にかたまって行動するまことに家庭的な雰囲気、一瞬12年前のメルボルンにタイムスリップしたかのような錯覚に陥った。思い出のスライドショーが始まる。1960年代サンフランシスコの港に立つ若かりし時のAitkin先生ご夫妻を白黒写真で見る。先生はPostdocを彼の有名なRoseとWoolseyのもとで勤められたのだ。当時オーストラリアからアメリカまで太平洋を船で旅したという。

翌朝は、参加者一同山歩き(bush-walking)に出かける。登山靴に半ズボン、ナップサックを背負い、ひさしにハエよけフリルのある帽子をかぶるとオーストラリア風bush-Walkerのできあがりだ。ユーカリの林に分け入って小川のせせらぎ沿いに歩くと、容易に野生動物に会える。夜行性の有袋類ウオンバットの巣穴や糞も発見した。濠州産の大型ワライカワセミがミミズをほじくった跡もある。オーストラリアも今年はエルニーニョの影響で異常小雨の乾燥状態が続き、山火事が続発し緑地が砂漠化しているという。地球規模の異変にこの大陸の動物達、とりわけ私の大好きな有袋類や単孔類も影響を受けているかもしれないと案じた。

シドニーから帰国の前夜は、オペラハウスでブッチーニの「マノンレスコー」を観劇した。最初はちょっと退屈で、別の日に上演されている「マクベス」の方がよかったのと思いながら見ていたが、場面がすすむにつれ段々引き込まれ、最終幕が下りるときには立ち上がれないほど感激した。オペラ歌手はイタリア語で歌うが、何と英語の字幕がステージの上方の液晶画面に表示されるのでよくわかった。わずか10日間だが思い出深い旅であった。